宮澤賢治センター通信

（岩手大学内）

（題　字／金森由利子）

第 13 号

発 行 人

〒020-8551
盛岡市上田四丁目３番５号
電話 019－621－6672
FAX 019－621－6493
宮澤賢治センター（岩手大学内）
発行責任者　岡田幸助

目　次

●巻頭言　理事挨拶……1
●新役員の紹介……2
●定例研究会の概要……2～6
●県都盛岡の追憶……4
●「ミニ・茶話会」便り……7
●賢治と音楽の会便り……8・9
●トピックス……9
●宮澤賢治記念短歌会報告……10
●エッセイ……11
●特別寄稿……12～15
●心象スケッチ2011……16

巻頭言

宮澤賢治への〈関心〉をどう深化させ拡大させるか
～四つの提案から～

盛岡大学学長・宮澤賢治センター理事　望月善次

「宮澤賢治センター」が立ち上がったのは、２００６年６月１日のことであったから、この通信が発行される頃には、約５年半が経過したことになる。６月１日というのは、丁度、岩手大学の「開学記念日」に相当し、設立が可能になったのは時の岩手大学平山健一学長の決断によるものであった。

設立のお願いをしたこともあり、初代代表をお引き受けしたが、その際掲げたのが、（現在も本センターのホームページの「設立趣旨　あいさつ」の箇所にある）**「どなたもどうかお入り下さい～〈賢治への関心〉それだけが条件です。」**であった。

２００６年以降の５年半は、日本の大学における「激動期」の中にあったわけだから、このようなセンターが存続できたことは、或る面から言えば、それだけで**「こんなことはじつにまれです。」**〔「東岩手火山」、『春と修羅』〕と言うべきことかも知れない。

この「こんなことはじつにまれです。」を支えてくださった方々、特に、平山健一学長の後も変わらぬ支援を戴いている藤井克己現岩手大学長、獣医学という従来の宮澤賢治研究からすれば近くない専門であるのに関わらず第二代の代表をお引き受けくださり、しかも定年退官後も引き続いて献身的に働いていてくださっている岡田幸助現代表、実務を担っていてくださる鈴木幸一現センター長を初めとする岩手大学地域連携センターの方々（直接の窓口の早川浩之氏や菅波智洋氏そして佐藤竜一氏等の名前はどうしても落とせない。）などを初めとする関係の皆様に改めて感謝を申し上げたい。

宮澤賢治センターの活動は、現在、定期的に行っているものだけでも、「定例研究会」、「宮澤賢治記念短歌会」、「賢治と音楽を楽しむ会」があり、これ等はいずれも月例を守っているし、「定例研究会」の後は、講師を囲んだ「茶話会」も行っているから、「活動は地道に行われている。」としても良いであろう。

こうしたセンターの活動をより活発にするためにはどうしたことが考えられるか。

今回は、以下の四点に集約する形で述べることにしたい。

一　学生大会の復活

宮澤賢治センターの設立の願いの一つは、「若い世代と共に」という点にあった。

そのことを具体的な形にすべく、２００６年度から２００８年度までは「全国宮澤賢治学生大会」が開催されていた。また、その一環として「宮澤賢治記念学生短歌大会」も開催されていたし、盛岡市内数大学の連合による学生研究会も行われていた。（前者については、復活を祈りながら、「宮澤賢治記念短歌会」が、これを代行して開催している。）

学生諸君の参加を得ての復活を熱望する。

二　大学教職員への働きかけ
～「いわて高等教育コンソーシアム」との連携も視野に入れながら～

学生への働きかけと並んで、大学の教職員への働きかけも必要となろう。

現在は、例えば「定例研究会」開始時間の午後五時が象徴しているように、大学の教職員参加への配慮や働きかけが必ずしも十分ではない。宮澤賢治センターの設置場所である岩手大学はもちろんのこと「いわて高等教育コンソーシアム」の構成大学である岩手医科大学、岩手県立大学、富士大学、盛岡大学への働きかけや「いわて高等教育コンソーシアム」それ自体への協力依頼も必要となろう。

三　岩手県・盛岡市教育界への働きかけ

宮澤賢治センターの発展を図るためには、若い世代への働きかけは必至である。

「一」では、大学生の問題を述べたが、よりその下の世代の、小学校、中学校、高等学校への働きかけも必要となろう。岩手県や地元盛岡市教育委員会を初めとした教育界への働きかけも欠かすことのできないものであろう。

四　宮沢賢治学会イーハトーブセンター（花巻市）との連携

宮澤賢治の研究を担っている組織は「宮沢賢治学会イーハトーブセンター」である。花巻市のバック・アップもあり個人を研究対象とした学会では、毎年発行される機関誌『宮沢賢治研究アニュアル』を初めとして高いレベルを誇っている。

本センターが「宮澤賢治への〈関心〉」を掲げたのは、勿論、本質的な意味を込めてのものであったが、実際的なことを言えば、次のような裏事情もあった。一つは、岩手大学における宮澤賢治の質と量の問題である。つまり、宮澤賢治を専門に研究し、宮沢賢治学会イーハトーブセンターに加入しているような教員はほとんどいなかったのである。こうした事情は、もちろん多数の宮澤賢治研究者を擁し、予算的には花巻市の支援があり、事務的スタッフに関しても花巻市関係者がいる宮沢賢治学会イーハトーブセンターとは余りもの差があると感じていたからである。

ところで、宮沢賢治学会イーハトーブセンター〈http://www.kenji.gr.jp/〉との連携はないわけではない。本センターの「リンク集」の筆頭にもその名は挙げられているなどは、その象徴的事例であるが、連携の実はそれほど上がっているわけではない、例えばホームページのリンク集についても、私共はその筆頭に宮沢賢治学会イーハトーブセンターを挙げているのに、宮沢賢治学会イーハトーブセンターの方では、リンク先に本センターを挙げてさえいないのである。可能性の開拓は、大いに残されていることのみを述べておこう。

新役員の紹介

賢治に対して感謝

岩手大学
教育学部学生
大橋　春香

今年岩手大学（以下岩大）教育学部に入学しました。岩大に入学したそもそものきっかけは受験生向けの岩大の大学案内を目にしたことです。その大学案内の表紙には賢治さんのシルエットが印刷されていました。それを見て、一番好きな作家であった賢治さんの作品世界について詳しく知りたいと思ったのです。賢治さんと関係の深い岩大であれば賢治作品を深く知ることができるだろうと思い進学希望先を岩大にしました。

岩大で賢治作品を学ぶためにはまず入試という壁を越えなければいけません。学力のない私は、学力試験のない人文社会科学部のＡＯ入試と、私の通っている総合学科校に有利な教育学部生涯教育課程の推薦入試を受けることにし、高校二年生の二月から受験勉強という賢治さんについて学ぶ日々が始まりました。大学院で賢治さんの文語詩を中心に研究されていた先生に賢治さんの生い立ちや作品主旨など毎放課後図書館で特別講義という形で教えていただきました。高校の図書館には筑摩書房の全集や賢治研究の本が揃っています。大方、その先生の希望で図書館の蔵書となった本でした。それらの本を通した講義で、今までただ単純に賢治作品が好きだと言っていたけれど、今まで読んでなかった作品を読み、生い立ちを知るごとに賢治作品だけでなく賢治の生涯そのものにも興味がわいてきました。そしてますます岩大に入って賢治さんについて知りたいという気持は強くなっていったのです。

三年生の時の課題研究では「羅須地人協会〜宮澤賢治の公民館」というテーマで羅須地人協会中心に賢治さんを調べました。その際には大学の卒論で賢治さんに関するテーマで研究をされていた先生にもお世話になりました。ちょっとした物語を書いたり、どうしたらうまく説明できるのかと考えながら発表の準備をするのはとても楽しいものです。

また、実際自分で計画を立てて行った花巻までの道中は自分でも想像を絶する感情の変化があり、一生忘れることはできません。心から喜んだり感動して泣いたりするということを初めて知りました。受験勉強の日々が嫌になって途中で投げ出し、自己嫌悪に陥った時期もありましたがその時の感情ですら特別なものであると感じています。岩大生になった今思うことは賢治さんを知らなかったら、感じ得なかった思いが沢山あるということです。そんな賢治さんに感謝しつつ、賢治さんについて岩手でもっと知っていけたらと思います。

（宮澤賢治センター　理事）

定例研究会の概要

第55回　7月14日(木)

▽会　場　農学部2号館107号室

▽講　師　陸上自衛隊岩手駐屯地業務隊長　大場基美雄氏

▽演　題　「宮澤賢治が愛した浮世絵たち〜浮世絵、賢治とゴッホをつなぐもの」

▽司　会　石田　紘子

参会者　24名。

賢治と浮世絵

浮世絵研究家の中沢天眼氏によると、賢治は3〜4千枚もの浮世絵を収集したという。文語詩「浮世絵」、「浮世絵 北上山地の春」などの作品もある。羅須地人協会では浮世絵のオークションを行ったが、終いにはタダであげたという。盛岡の光原社の及川氏に浮世絵販売業を勧め、自ら「浮世絵広告文」を起案した。晩年、病床に伏す賢治の眼を慰めていたのは、壁面に張られた「東海道五拾三次之内　池鯉鮒」などの浮世絵であった。臨終の際、枕元の黒い紙ばさみには「浮世絵版画の話」が残されていたという。

大場基美雄氏

プジェー師は／古き版画を好むとか／家にかへりて／たづね贈らん　（賢治20歳）

実家が質屋を営んでいたことから、家で質草（若しくは質流れ）の浮世絵を見た可能性がある。賢治は二十歳前後から生涯を通して、浮世絵を愛していた。

ゴッホと浮世絵

ゴッホは生涯を通して弟テオとともに、約４００点以上もの浮世絵を収集、後世の日本人による解読を託した謎めいた浮世絵風油絵を残す。

「ぼくらは日本の絵を愛し、その影響を受け、またすべての印象派の画家はともに影響を受けているが、それならばどうしても日本へ、つまり日本に当たる南仏へ行かないわけにはいかぬ。だから芸術の未来は何といっても南仏にある、とぼくは思っているのだ。」

よって、彼の浮世絵風油絵は東西融合した浮世絵風の油絵であって、単なる浮世絵の模写ではない。その「向日葵」は日の本つまり日本に向かって咲く花、光から色彩溢れる印象派芸術が誕生した。

絵画技法のみならず浮世絵を画き、浮世絵に描かれた自由闊達な日本人、日本への憧憬が、ジャポニスム（日本主義）として、画筆を持った改革者ともいえる印象派の画家達による芸術的な社会変革の思想的な支えとなった。

「ゴーガンへの返事に僕はこう書いた。肖像画の中で自分の個性を強調することが僕にも許されるなら、僕は自分の肖像の中に、自己のみならず印象主義者一般を表わそうと努めた。したがって、僕はこの肖像画を永遠の仏陀の素朴な崇拝者である坊主の像だと考えているのだ。」

ゴッホと賢治

弟、清六によれば、賢治とゴッホの出会いは二十歳前後、当時、既に『白樺』（第三巻十一号）がゴッホ特集号を掲載し、ゴッホの妹ケーによる『追想のゴオホ』（多胡淳一訳）、木村荘八訳『ゴオホの手紙』が刊行されていた。

文語詩「浮世絵」はゴッホの影響下にあったかは不明ですが、言葉による色彩の視覚化は緻密で計算し尽くされており、色彩の用い方は詩情（心情）の動きを見事に反映している。

賢治23歳、保阪嘉内宛書簡中「浮世絵が面白くなって集めたり」、折しも世は浮世絵ブーム、ゴッホが受けた浮世絵からの衝撃と絵画技法的、哲学的影響を、賢治もまた同様に受けたせいかもしれない、「浮世絵広告文」中に「（浮世絵は）ゴッホ、セザンヌの新流派さえ生みだした」とあるように。

賢治24歳、次の二首、清六、「若いころの二人の相似」、国柱会信行部に入会。

サイプレス　忿りは燃えて
天雲り　うづ巻をさえ灼くかんとすなり

天雲の　わめきの中に湧きいでて　いらだち燃ゆる　サイプレスかも

賢治26歳、後に心象スケッチ「春と修羅」に所収される「屈折率」「くらかけの雪」を書き、「春と修羅」の制作を開始、賢治28歳、心象スケッチ「春と修羅」を自費出版する。

「春と修羅」には「ZYPRESSEN」の言葉が二個所、ゴッホの絵「ZYPRESSE」（糸杉）の複数形、つまり、一人の修羅として、牧師でありながら仏陀の永遠の崇拝者たるゴッホへの共感を、苦悩する二人の糸杉たちと表現している。

清六、「心象スケッチ「春と修羅」とゴッホの「サイプレス」との間に交響する共感」

ゴッホが賢治に大きな影響を与えたひとりであることは、疑いのない事実である。

清六、「阿修羅と現じ、あるときは緊那羅とも顕れ、また時には牧師とも見え、いまどこかで静かに微笑している二人」

なぜに心象スケッチ（mental sketch modified）なのか、「宮沢さんはこれは詩集ではないと云つてゐられる。或心理研究への序まくの鈴の音にすぎないと云はれてゐる」。

そう賢治は言葉によって心象を描く印象派の画家なのです。だから、賢治の作品は視覚的なのです、まるで色鮮やかな印象派の絵や浮世絵を見ているよう、言葉を絵の具にカンバスにペンを走らせたのです。典型的なものは、「小岩井農場」（視聴覚を駆使し映画的）、心象スケッチ「外山の印象　浮世絵　北上山地の春」でしょう。

さいごに

賢治は、ゴッホが浮世絵から大きな影響を受けたように、ゴッホを通して浮世絵を学び印象派の手法を学んで心象スケッチを描き、芸術によって人を救い社会を改革する思想を学んだ。もちろん、それ以前に浮世絵に接し、基督教や大乗仏教に触れ感化を受けていたこと、トルストイからの大きな影響は間違いなく、正確に言うならば、賢治の素地がゴッホとの運命的な出会いによって、その境遇の相似から来る強い共感と相まって、さらに啓発されたというべきか。

（大場　基美雄　記）

第56回　9月16日（金）

▽**会　場**　農学部1号館1号会議室

▽**講　師**　宮澤賢治センター会員　石原　黎子氏

▽**演　題**　「賢治作品朗読―私の場合」

▽**司　会**　羽倉　淳

参会者　28名。

最近印象的だったのは、俳優白石加代子朗読の『銀河鉄道の夜』だ。作品本来の持っている世界に、白石加代子というすぐれた表現者によって掘り当てられた鉱脈が加わり、彼女ならではの『銀河鉄道の夜』の世界がそこに出現していた。そういう朗読を私は好きだ。作品ではなく、結果として自分自身を表現している朗読や歌唱を、私はあまり好まない。

では私の朗読に「賢治作品の世界」は存在するだろうか、やはり単に私自身の露出にすぎないのではないかと自省しながら、いつも試行錯誤だ。

『高原』という詩がある。「やっぱり光る山だたぢゃい」「鹿踊りだぢゃい」の二つの「ぢゃい」はどう違うのか、「ホウ」はどう発声するか、こんなことをあれこれやってみるのは楽し

い。前者の「ぢゃい」は軽い自嘲と失望、後者は意外な発見の喜び、というところか。「ぢゃい」の読み方が決まればそれに連動して「やっぱり」や「鹿踊り」の読み方も自然に決まる。「ホウ」は、額に乱れる髪の毛のさまはまるで鹿踊りじゃないかという発見の驚きや感心の「ほう、へえ」でもいいが、1行に独立させて「ホウ」と片仮名だから、「ホーイ！」というような気もちの、高原の呼び声にしてみている。

賢治と同じ花巻地方の言葉のネィティブスピーカーの私にとって、賢治作品の地域語の表記はことのほか魅力的だ。が、音声化にあたっては解決のつかないことだらけだ。

「泣ぐだぁいよな気もす」「くるしまなぁよに」「生きものだがも知れないじゃい」は、「泣ぐダァイ」か「ダァィ」か「デェ」

石原黎子氏

県都盛岡の追憶

*五十嵐幸男

宮沢賢治や石川啄木が学生時代を過ごした盛岡の追憶を記してみます。

私の県都盛岡での生活は、盛岡農学校獣医科四年間と高等農林学校獣医学科三年間計七ケ年の学生時代であり、初めて盛岡に足を進めたのが昭和七年四月、東北の春まだ浅い頃で、父の案内による盛岡農学校入学式の前日でありました。旅館での夕食時、女将の「ズッパリオアゲンシェ」の南部弁が理解できず、父の通訳で「十分食べなさい」との意味が理解でき、同じ岩手県内でも水沢（現在奥州市）以北の南部領と以南の伊達領で方言や生活様式に差のあることを実感として受けた。

当時盛岡の人口約七万（現在三十万）、その玄関口の盛岡駅は明治二十三年十一月一日の開通で、北上川と雫石川の合流のデルタ地帯であった。仙台―盛岡間は一日に二回旅客列車が運行され、一日の乗客は二、三〇名位であったとの記録がある。当時駅舎は西洋風のモダンな姿で、駅のホームに清水が湧き、旅人も好んで飲用したという。私の学生時代、剣道部の仙台遠征時に応援団の声援を受け出発した思い出もある。現在では東北新幹線の主要駅となり、駅舎も拡大近代化し、構内に土産物等を中心にデパート同様の店舗が並んで、乗降客も極めて多い。

駅より出て中心街に向けモダンな開運橋を渡り、昔の菜園地帯に新設された新大通りの街路樹を眺めながら歩くと、不来方（こずかた）城跡方向に進む。バスガイドが「フライボー」と呼び失笑を受けたとの逸話もある。石垣を背に消防会館と武徳殿がある。この武徳殿は明治四〇年代の建築で、私にとって学生時代の剣道の修練場であり、決戦の道場でもある。岩手医専主催の北日本中等学校大会に於いて、盛農三年時代に個人優勝、続いて翌年決勝戦で宿敵盛岡中学校を撃破、団体優勝を獲得し、時恰も実業教育五〇周年祭の年でもあり、開校以来始めての優勝でもあった。更に、盛岡高農主催の第七回東北六県中等学校剣道大会出場の選手中三名の優秀選手に推薦された経緯もあり、高農時代合宿の道場でもあった。この道場もその後、公園整備計画により昭和五七年解体撤去され緑地化された。お城の坂道を登り、本丸に入ると大正天皇の御学友であった南部利祥中尉の騎馬像があったが、これもまた大東亜戦争当時銅像も応召され台座のみ残っている。

盛岡城の総面積は十二万二千平方米に及ぶ広さで、現在も市民憩いの場である。本丸より朱塗りの渡雲橋を渡り、二の丸に足を進めるとここは、石川啄木や宮澤賢治が学生時代散策を重ねたと伝えられ、その記念碑もあり、更に盛岡生まれの碩学で、有名な「武士道」を著し国際的評価も高い新渡戸稲造氏の「太平洋の架け橋にならん」の記念碑も目に入る。公園内の広い運動場で高農時代、ロサンゼルスオリンピック馬術大障碍で金メダルを獲得した西竹一中尉（男爵）のウラヌスを駆しての模範馬術を見学し、ウラヌス号の威容にも接することが出来た。そのバロン中尉も硫黄島の激戦中自らの拳銃により自決している。時に四十四歳、戦車部隊長はウラヌスの鬣を肌身離さず、オリンピック当時使用した鞭と共に持って戦車隊を指揮し「俺は戦車隊長だが馬を愛するから最後まで長靴と拍車をつけて死ぬ」と述べていたという。武人の最後とはかくありなんとの感銘を深くしている。

岩手公園より中の橋通りに入ると直利庵がある。賢治も蕎麦やサイダーが好きで足を向けたらしい直利庵は、明治十七年創業の老舗であり、私も学生時代友人と共に訪れた経緯を思い出す。店に入ると塗りのお椀に入った少量の蕎麦を何杯も重ねながら食べる方式で、具が沢山あって蕎麦は極めて少量。客の食べる合間をみて投げ込む方式で現在最高記録は五五九杯と言われている。また賢治の花巻で年一回全国のワンコ蕎麦大会が開催されている。賢治の供養を兼ねて参加するもよし。

盛岡を語る時忘れてならないのが馬検場と馬市のことである。八幡神社の近くに南部馬のせり市があり、「せり」を通じて馬の取引が行われた。農林省の種雄馬や陸軍御用馬に合格すると、生産者は親族始め知人を集め、市場の一角で宴を開催し愛馬との別れを惜しんだ。

山本嘉次郎監督の映画「馬」もここから生まれたという。「せり」の時馬の評価を唱える鑑定人の甲高い声も忘れがたく、後輩坂下君の祖父が有名な鑑定人であり、馬の評価方法の説明を受けたことも思い出となっている。

最後に今回の未曾有の大災害に見舞われた皆様に心からのお見舞いを申し上げますと共に、ご健康の維持回復をお祈り申し上げます。

（くまがや賢治の会『ミミズク通信』第47号より転載）

*前日本獣医師会長、大正六年一月十九日生まれ

か、「くるしまナァよに」か「ネェよに」か、「知れナイジャイ」か「ナイジャィ」か「ナイジャ」か「ネェジャ」か「ネェジェ」か？そもそも仮名の発音に無い音を表記しようとしているのだ。「あめゆじゅとてちてけんじゃ」の「ち」は、「チ」と「ツ」の中間の音であるらしい。賢治自身、得心のいく表記いかない表記があったろうと思う。表記しようとしたこと自体「こんなことは実にまれです」（『革トランク』）。

　これら地域語は、まず出来るだけ賢治の書き残した表記通り読むことにしている。賢治が使い方や表記に工夫をこらした、詩の言葉・童話の言葉だから。「表記通り」ということ自体が難しいのだが。

　短歌や詩は基本的にそのまま作者自身の内面の発露だ。自分が賢治の気もちになったつもり、賢治の眼で見、耳で聞くつもりで、精一杯読まなければならない、おこがましくもあり賢治の思いにはるか及ばないとしても。

　童話は、根底の語り手はどの作品も賢治であるわけだが、それぞれにふさわしい語り手を想定してみる。山の女神、森や林や野原や里に宿るもの、神仏の化身……、女か男か、共通語か訛ってるか、訛りの程度は……などのイメージを作品全体から感じ取る。『なめとこ山の熊』に、荒物屋の主人に買いたたかれる小十郎に同情した賢治が突然文中に顔をあらわにして社会経済の仕組みを批判するくだりがある。山の精霊か何かに仮託して物語を語っていた賢治が我を忘れて仮面を剥いだというような、愉快な個所だ。ここはもちろん、賢治にご登場願って語ってもらおう。

　共通語の発音・イントネーションで読むのか地域語のそれで読むのかは、詩や文章の内部から呼び覚まされる言葉の呼吸に従うとしか言いようがない。

　共通語で書かれていても、地域語のリズムが強く立ち上ってくるのは、喜び、悲しみ、怒り、煩悶、愛憎……という切実な感情・日常の生活感覚・実生活上のことなどをテーマとしたもの、そして「学童もの」と呼ばれる作品をはじめ地域の生活風土が色濃く描かれたものなど。

　同じイーハトーブの世界でも、『セロ弾きのゴーシュ』や『銀河鉄道の夜』など欧米的イメージの強いもの、中央アジア、天上など、異郷が舞台のものなどは、地域語のリズムは感じられない。

　賢治童話の動物たちは訛らない、思慮深くとても美しい言葉を使う。擬人化された存在ではない、人間界より聖なる独自の世界を持った存在なのだ。例外的に訛っている『鹿踊りのはじまり』の鹿たちの言葉は、あくまで農民青年嘉十の受け止めたもの。「鹿どもの風にゆれる草穂のような気もちが、波になって伝わってきた」とある、嘉十はテレパシーで感じたのだ。荒物屋の主人の前では卑屈な地域語の小十郎は、熊とは風格ある言葉で死生観を語り合う。この時すでに小十郎は聖なる向こうの世界の存在でもあったのだろう。

　精神世界や思念がテーマのもの、心に緊迫感を抱えたもの、メッセージなどは、地域語のリズムは立ちあがってこない。『春と修羅』の「序」「春と修羅」「小岩井農場」（農夫たちとの会話部分などを除いて）、『注文の多い料理店』の「序」など。

　短歌・文語詩は、その定型のリズムの中に地域語のリズムが介在する余地は無いようだ。その中にあって、短歌『ちゃんがちゃがうまこ』四首は、定型のリズムに地域語の語彙とイントネーションを乗せ、希有の情感を生んでいる。

　『雨ニモマケズ』は以前人前で読めなかった。迫りくる死を前にした賢治の、「サウイフモノ」になりたいという「ねがい」の強さと純度に私の心が付いていけなかった。それが、ある演劇ワークショップをきっかけに、野に生きる昔の老婆の立場で地域語の読みで読めるようになった。賢治にはなれない。

　東日本大震災後、日本はもとより世界中で『雨ニモマケズ』が読まれ歌われる機運の中、私に憑依して『雨ニモマケズ』を力強く朗読するのを後押ししてくれていた老婆のオーラが心なしか弱まってきている……。座敷ボッコが去るように、私の中から老婆が去る日が近付いているのだろうか。

（石原　黎子　記）

第57回　10月28日(金)

▽**会　場**　農学部1号館1号会議室

▽**講　師**　岩手大学教育学部教授　中村　一基氏

▽**演　題**　「《ドリームランドとしての日本岩手県》考」

▽**司　会**　小島　聡子

参会者　27名。

　詩人天沢退二郎氏が「われわれはくりかえし、イーハトヴ＝岩手県ではないということに思いをいたすべきである。ましてや、〈岩手県は決してイーハトヴではない〉ということに。」（『宮澤賢治イーハトヴ学事典』弘文堂）と述べています。

　確かに賢治によれば、「イーハトヴとは、ドリームランドとしての日本岩手県」（『イーハトヴ童話　注文の多い料理店』広告チラシ（大））であり、「ドリームランドとしての」が「日本岩手県」を形容しています。僕も「ドリームランドとしての」がキーワードになると思います。

　さて、『イーハトヴ童話　注文の多い料理店』（大正13年12月刊）には、「イーハトヴ」という語がなく、『イーハトヴ童話　注文の多い料理店』の出版時に、「イーハトヴ」が〈地名〉であることを知っていたのは何人いたでしょう。

　実は、大正12年4月15日の「岩手毎日新聞」に掲載された賢治童話「氷河鼠の毛皮」の読者と、

中村一基氏

『イーハトヴ童話　注文の多い料理店』の広告チラシ(大)(小)を見た者ぐらいだったのです。「氷河鼠の毛皮」に「イーハトヴはひどい吹雪でした。」「イーハトヴの停車場」とあるので、「イーハトヴ」が〈地名〉であることがわかります。

でも、「岩手毎日新聞」の購読者が、その日に掲載された賢治童話の〈地名〉を覚えていたか。そのことに気づいた賢治が『イーハトヴ童話　注文の多い料理店』の広告チラシ(大)(小)と、二種類の広告葉書を準備します。広告チラシ（大）（小）の「イーハトヴは一つの地名である。」によって、「イーハトヴ童話」が「イーハトヴ」という土地を舞台にした童話であること、さらに、その土地に関しては、「大小クラウスたちの耕していた、野原や、少女アリスが辿った鏡の国と同じ世界の中、テパーンタール砂漠の遙かな北東、イヴン王国の遠い東」（チラシ（大））と、世界の童話・民話上の国土と同じ地平にあることを知ります。「イーハトヴ」の説明が、これで終われば「イーハトヴ」は《童話のなかの土地》となりました。

ところが、ここで「イーハトヴ」が「実にこれは著者の心象中に、この様な状景をもって実在したドリームランドとしての日本岩手県である。」という重要な定義が出てきます。広告チラシ（小）では、「イーハトヴは一つの地名で夢の国としての日本岩手県であります。」とだけ説明され、広告葉書には、この説明は一切ありません。

さらに「そこ（「夢の国としての日本岩手県」）では、あらゆる事が可能である。人は一瞬にして氷雲の上に飛躍し大循環の風を従へて北に旅する事もあれば、赤い花杯の下を行く蟻と語ることもできる。罪や、かなしみでさへそこではきれいにかゞやいてゐる。」（チラシ（大））と語られます。「夢の国としての日本岩手県」は「まことにあやしくも楽しい国土」なのです。

大正13年の日照りが続き、旱魃に襲われ、その結果、一家離散・娘の身売りなど悲惨な状況下にある岩手県ではありません。ただ、「現実の悲惨な岩手県」と「夢の国としての岩手県」という《二重国土の岩手県》という認識になれば、「ドリームランド（夢の国）としての」という形容は《願望》としか聞こえません。そうなれば、「イーハトヴ」は「ユートピア」に接近していきます。賢治は「イーハトヴ」が「決して畸形に捏ねあげられたユートピアではない。」（広告チラシ（大））といいます。

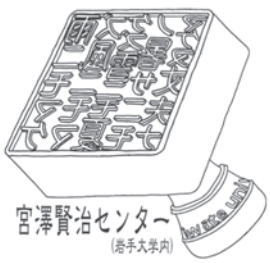
ここで、賢治がユートピアの観念に否定的なのは理解できますが、これもまた、単純にそう言い切れません。「〈ドリームランド〉とは必ずしも〈ユートピア〉と同義語ではない。それは、後者に内在するイデオロギー的側面から自由であるからだ。」とは、天沢退二郎氏の言葉ですが、賢治の「労農党」へのシンパシーや『農民芸術概論』へのトロッキーやモリスの引用を見るとき、「ユートピア」総体を単純に否定しているとも思えません。

ここで、再度注目すべきは、「これ（「夢の国としての岩手県」）は著者の心象中に、この様な状景をもって実在した」の部分です。「イーハトヴ」は、「1、著者の心象中に」「2、この様な状景をもって実在した」「3、ドリームランド（夢の国）としての」「4、日本岩手県」という重層構造で理解されます。「この童話集の一列は実に作者の心象スケッチの一部である。」（広告チラシ大）。「イーハトヴ」の二重性は、現実と夢との対比ではなく、《岩手の自然世界と賢治の心象世界》における《実在》の問題ということになります。

「心象スケッチ」は、「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。」と作者の想像でも創作でもないと強調されます。「これらは決して偽でも仮空でも窃盗でもない。多少の再度の内省と分析とはあっても、たしかにこの通りその時心象の中に現はれたものである。」（「広告チラシ大」）と推敲の事実も「心象スケッチ」のゆえでありました。実は、この段階でも、「心象スケッチ」と固有の「イマジネーション」との違いが、それほど明確ではないのです。

なぜなら、『イーハトヴ童話　注文の多い料理店』「序」の「かしはばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立ったり」しているのは賢治であり、彼が通りかかったり、立ったりしているのが「日本岩手県」であり、そこで「もうどうしてもこんな気がしてしかたない」として描かれたのが、「ドリームランドとしての日本岩手県」の状景だからです。いま、賢治入門者のたどたどしい思考の先に、「イーハトヴとはしょせん、ある個人の意識圏の柵内にとどまる閉鎖空間ではないか。」（谷川雁）、「自然の多声に聴き入る感応力は、（略）それ（想像力）よりももっと微細で幽けき霊感や直感を通して初めて認識可能なリアリティー」（鎌田東二）、「賢治を一人の霊媒とした語りの世界なのである。」（原　子朗）「イーハトヴは、当時の岩手の苦渋に満ちた現実を色濃く反映した、（略）よりよい未来、ほんとうの幸せを、必死に求め続けている世界」（入沢康夫）といった先達の言葉が見えています。もう少し歩いていってみようと思います。ありがとうございました。

（中村　一基　記）



「ミニ・茶話会」便り
―一茶一話―

茶話会は定例会終了後、小1時間講師を囲みお茶とお菓子を頂きながら、人によってはビールを飲みながら、講師への質問や自身の考えなど忌憚の無い話し合いが自由に出来る十分に楽しめる場です。今回もまたその様子をお伝えいたします。

○　浮世絵から影響をうけたゴッホは〝絵〟を描いた。それは印象派として浮世絵の作法のままに、自身が心に受けた〝印象〟をそのまま絵に描いた。それらの絵は生前評価されなかった。

また賢治さんはゴッホと同様にそのビジュアルなものを〝心象スケッチ〟と言って、その心に受けた印象を絵ではなく〝文章〟として書いた。賢治さんは〝印象〟という生命的コードがゴッホと同じく、二人のコードどうしが〝共鳴〟し浮世絵にひかれて行ったという。しかしその当時の人には理解されず、賢治さんも生前評価されなかった。講師の話はのっけから核心部分に入った話になりました。

講師の話から〝心象スケッチ〟という言葉を、ゴッホの姿を通して解説頂き明確になったような気がしました。非常にエキサイトな講演とお茶を飲み菓子を食べながらの質問会でした。

○　〝朗読とは〟と言うことを考えさせる一時でした。朗読は〝文字〟と〝音楽〟を一つにしたものである。即ち、発声の部分は音楽となり、記号としての部分は文章となった。確かに、西洋音楽は神への祈りの言葉を発声した時、そこに一つのリズムとメロディーとハーモニー（音楽の三要素）が現れ、これが西洋音楽の原初であると言われている。また、記号としての文字は表音文字や表意文字等種々あるが、今回の朗読は賢治さんのいわゆる〝詩〟を、リズムやメロディーまた方言の発音等を使い、表現者が〝詩〟から受けた思いをどう表現するかと言うことを考えさせられる一時でした。それにしても朗読を聴いた感動は表現者に依るものか、賢治さんに依るものか、ともかく素晴らしい一夜でした。

○　イーハトーブは、はたして岩手県の事かという大きな、今まで余り疑問にも思っても見なかったことへの問題提起から始まりました。それは「注文の多い料理店」の新刊書案内の中の広告文に〝イーハトーブ〟は地名であると言っているが岩手という説明は無い、がしかし心象スケッチとしては〝実在した〟といっている。また《ドリームランドとしての日本岩手県》とあるがはたして岩手県はドリームランドだったのか。かえって飢饉や疫病、娘の身売り等の多発するドリームランドの反対の国土では無かったのではないか。ドリームランド＝イーハトーブなのかと言えばそうでない。現実の世界はイーハトーブ＝岩手県ではないとの問題提起であった。そこには天沢、入沢、原氏等々各氏の意見を網羅してもらい、改めてイーハトーブ＝岩手県を見つめ直す契機になりました。中にはこの広告を出した当時の検閲を逃れるため明示できなかったという説も出されました。その上、賢治の信仰の世界の最後は国柱会の信仰では無かったとの説も出され会話はどんどん発展し、活発な論議が交わされる茶話会でした。

○　尚、何時もこの茶話会の準備をされている小菅さんにその準備の様子を紹介して頂きました。陰の人を少しでも知って頂ければと思います。

（姉歯武司　記）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

茶話会運営メンバーとして

小菅　アイ

私が茶話会の飲料、茶菓子等の準備・調達を担当して早いもので三年余となりました。

毎回、どんな菓子や飲料にしようかと季節や参加者を思い浮かべて思案しております。普通は定例会の2～3日前からスーパーやデパート、小売店の食品コーナーを回り美味しそうな菓子や果物など新しいものを楽しみながら捜しております。ただし、小額な予算の中で金額を気にしながらの作業です。

グルメ・ブームの昨今、和菓子・洋菓子とも進化してきて、甘みを抑えるとか人々のニーズに応える製品は多種多様となり選択に困るような昨今です。私は栄養士なので職業柄どうしても栄養表示や原材料に眼が行ってしまいます。内容量のグラム表示はもとより、準備の関係で個数表示が気になりますが、それが無い物も有り、真剣の余り袋の上から触って数え、店員さんに変な眼で見られるという、笑えぬような笑い話も経験しました。

中には、新しい菓子で健康そうな七種類の野菜を練り込んだ棒状のビスケットを見つけ購入したり、三本10ｇで50Kcal、Caも多い菓子を、孫のおやつにと店の人に言って試食品を試食してみてから、茶話会に買って帰ったりしたこともありました。また、基本的にはスナック菓子は敬遠していますが、中には北海道産昆布と焼津産鰹節のダシで旨味を出したスコーンには感心し虜になりました。これはビールやお茶に良く合うのです。

ところで、茶話会のお手伝いをさせて頂き、おかげさまで賢治さんに関わるいろいろなことを学びました。立派な講師の諸先生や参加されている方々のお話は講演では聞けない裏話もあり、賢治さんの少年時代のエピソードが聞けたり、本当に今まで知らなかったことを一杯知ることが出来感謝しております。

甘い菓子を頂きながら話し合いが盛り上がり、あっと言う間に時間も過ぎ、楽しい気分で皆さんが笑顔での散会を迎えるときは、運営サイドとして本当に良かったと幸せな気持ちになります。

これからもしっかり茶話会のお手伝いをして参りたいと思っております。

賢治と音楽の会便り

賢治さんと教会で音楽を楽しむ

岡田　幸助

姉歯さんの発案で「賢治と音楽を楽しむ会」が開かれるようになって既に38回を数えてしまった。これもこの会そのものの魅力と小野伴忠先生、姉歯さん、そしてわざわざ毎回、名古屋から新幹線で参加してくださる楢原さんの熱心さのお陰であろう。私は音楽の素養が全くないので、ただ聴いて楽しむだけで難しいことは全く分からない。しかし私にとって土曜日の午後、木立の中の百年記念館で、クラシックを聴くのは至福の時である。

百年記念館の建物は元来農学部の同窓会館で１９２８年（昭和３年）５月に盛岡高等農林学校開校25周年を記念して卒業生の寄付で建設された。同年10月陸軍特別大演習に来られた多くの宮様がここで休憩された。その後、演習林の事務所などに利用されたが、農学部百周年を記念して内装が改修され大変美しいレトロな建物と部屋になっている。現在、農学部の同窓会の事務局が1階で事務室を構え、二人が常駐している。私たちはその2階の会議室で毎回音楽を楽しんでいる。窓を開けると北水の池が望まれ、植物園の樹木が日陰を作っている。吹き抜ける緑の風もさわやかで、音楽に合わせて小鳥のさえずりも聞こえる。

７月の「音楽を楽しむ会」は平成23年７月16日（土）14：00から開かれた。出席者は姉歯、岡田、楢原、村田の４名であった。最近、コーヒーをポットに入れて持参し参加者に振る舞ってくださる北田さんはお休みだった（残念）。姉歯さんは毎回資料を用意してくださる。司会進行も姉歯さん、まず「一言どうぞ」と一人ずつ挨拶を述べ、名曲鑑賞が始まった。前回はモーツアルトの「ピアノ協奏曲第26番　戴冠式」と「交響曲第39番」を聞き、最後にシャブリエの狂詩曲「スペイン」を聴いた。今回もモーツアルトのピアノ協奏曲と交響曲を聴く。ピアノ協奏曲は「27番」、交響曲は「38番　プラハ」を聴く。特に「ピアノ協奏曲27番」は死の直前35歳の傑作。貧乏と病苦の中水晶の様な透明さと精彩さの最後の器楽曲「白鳥の歌」と言われる。「告別の歌」「天国の門に立つ曲」（アインシュタイン）。ベートーベンが研究時代丹念に研究したといわれる傑作。「交響曲38番」は30歳の作。演奏は古楽器を使いモーツアルト時代の演奏法の曲とワルター・ウィーンフィルで聴く。49の交響曲の中では最高位の作品ともいわれる。爽やかで端麗な曲。特徴は3楽章でなる（イタリア風　ドイツでは異質）。最後はスッペの喜歌劇「軽騎兵」序曲を聴く。最後にまた参加者全員に「いかがでしたか」と一言感想及び要望や提案を訊かれた。

終了後、全員をお連れして「関豊大郎と宮澤賢治　賢治が学んだ72の石たち」展に案内した。見学した人からは「今回教えてもらわなければ、図書館で賢治関連のこんなすばらしい展示が開催中であることを知らなかった」と感謝された。賢治が手に取って眺めたであろう宝石のように美しい鉱石を見て、皆様満足された。

百年記念館

８月はお休みとし、９月の例会は９月17日に開かれた。小雨の降る中を百年記念館に入ると、暗い。２階に行くと、既に姉歯さんと名古屋からの楢原さんは来ておられた。電気も付けないで薄暗い中、二人はテーブルを挟んで座っておられた。「どうしたのですか、電気も付けないで」とお聞きしながらスイッチを入れたが電気がつかない。姉歯さんによると「今日は大学の電気工事で全学４時まで停電」と知らされた。さあ困った。農学部１号館は工事が終わり、電気がついているらしいという。たまたま１号館の大会議室は昨晩の例会で使用し、例会終了後、その鍵を守衛所に預かってもらったばかりなので、守衛さんに頼めば返してもらい、開けられるかもしれないとも思ったが、土曜日で１号館の建物自体に入ることができない。また大会議室使用の許可も得ていない。急遽、大会議室の使用を頼むにしても、休日のため事務職員の方も不在である。これではわざわざ新幹線で来られた楢原さんに申し訳ない。楢原さんからは「今日は中止でもいいですよ」と言ってくださった。

そこでひらめいたのが近くの教会の礼拝堂をお借りすることであった。早速、工学部裏にある日本基督教団館坂橋教会の村上義治牧師に電話をした。牧師さんは事情を理解してくださり、快く会堂を貸してくださった。そこでボーズという小型のＣＤプレーヤーを抱えて、自動車で教会に向かった。教会の前に着いたが、さてどこに車を駐車させたら良いか分からない。牧師さんに面会して、下の駐車場を教えていただいた。会堂の前列の椅子にプレーヤーを設置して、少し開会が遅れたものの、コンサートを開始した。

館坂橋教会

今回はモーツアルトを離れてチャイコフスキーを聴くことになった。賢治さんは良く「交響曲第４番」や「第６番」を聴いていたようだが、今回は「ピアノ協奏曲第１番」と「交響曲第５番」を聴く。「ピアノ協奏曲第１番」の冒頭はあまりに有名な曲である。ニコライ ルビーンシュタインに献呈したが酷評されたそうである。しかしハン

スホンビューローがその後、激賞した。「交響曲等5番」は4番の明朗さと6番の陰鬱さの中間で、2楽章の美しいアンダンテカンタービレがある。最後はウィーン・フィールのニューイアー・コンサートで恒例、最後の曲「ラデツキー行進曲」を聴く。

館坂橋教会は10年前に新会堂を建て直したばかりで、礼拝堂は広く、ステンドグラスが美しい。礼拝堂は音響効果も配慮され、音の切れがよく、すばらしい演奏を楽しめた。宮澤賢治は内丸教会と下ノ橋教会に行ったことはあると聞いているが、1930年（昭和5年）建設の館坂橋教会（旧菜園教会）に行ったことはないはずで、今回が初めての訪問になったに違いない。今回ははからずも「賢治さんと教会で音楽を楽しむ会」となった。ハプニングが生んだすてきな贈り物に感謝したい。

❊❊❊❊❊❊❊❊❊❊❊❊❊

10月の「賢治音楽会」は、先月に引き続き、チャイコフスキーを楽しみました。「ヴァイオリン協奏曲」と、賢治さんが良く聴いたと言われる「交響曲第4番」です。「ヴァイオリン協奏曲」はベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスの作品と良く並び称される〝四大ヴァイオリン協奏曲〟と言われる名曲です。「交響曲第4番」は後援者のメック夫人に、〝「運命」と「人生」を語っている〟と解説しており、チャイコフスキーの《運命》とも言われている曲を聴きました。

今月のクラシックを聴いた後、宮澤賢治センター第2代代表としてお世話をして頂いている岡田代表が奥様と一緒に、来年からウルグアイ共和国大学からの要請で獣医病理学の指導に出向かれることと聞いております。長い間、「賢治と音楽を楽しむ会」をご一緒頂き感謝いたしております。

そのご出発の意味を含め、終了後皆さんと一緒にサラ・ブライトマンとアンドレ・ボチェッリの「タイム・トゥ・セイ・グッバイ」を聴きました。一部私の意訳も有りますが、以下の様な内容の歌です。

さよならを言う時
あなたと見たことも暮らしたこともない国々へ
今こそあなたと暮らそう、旅立とう
船に乗り、海をこえて。
そう、私は知っている
それは私のさだめなのだとさよならを言う時に。

（姉歯武司　記）

トピックス

「銀河鉄道」ここが舞台

矢巾 南昌山登山口に看板

童話「銀河鉄道の夜」と南昌山の関わりを紹介する看板

矢巾町は同町煙山の南昌山登山口付近に、同山と宮沢賢治の童話「銀河鉄道の夜」の関わりを示す看板を設置した。山開きに合わせ看板の除幕式が5日行われ、講演会で賢治と南昌山の関係を登山客らにPRした。

看板は縦1・8㍍、横6㍍。事業費は約270万円で「銀河鉄道の夜の舞台は南昌山」と記した。元町収入役で町宮沢賢治を語る会長の松本隆さん(79)＝同町北矢幅＝が昨年11月に出版した著書で、賢治と南昌山の関わりを紹介している。

登山口付近の古本店「イーハトーブ本の森」で開かれた講演会で講師を務めた松本さんは「昔から霊山として知られる南昌山、世界の童話作家の賢治、その親友、矢巾町出身の藤原健次郎のことを知ってほしい」と呼び掛けた。

山開きの5日、町内外から約250人が南昌山の山頂を目指した。同町商工観光課の佐藤武課長は「看板設置を機に賢治との関わりを広くPRしたい」としている。

2011年6月7日付『岩手日報』

宮澤賢治記念短歌会報告

会員　阿部真紀子

平成二十三年十月八日、百年記念館で、今月担当の姉歯武司氏の司会で進められた。

最初に望月先生からの宿題、補充短歌を学んだ。選択肢編ではほゞ全員が同じ答えになったが自力補充編で興味深い結果の出た歌があった。「目線同じ高さになりて向き合えば（　）才って目がきれいだね」三枝浩樹作で、出席者六名の票は〇才二名、一才二名、十一才一名、八十才一名と分かれた。夫々の生活体験を基に意見を述べた後、正解は十七才の相聞歌と話され、一同びっくり。作者の意図と読む者の解釈にはこんな隔たりもある事を知る。

作者の名を伏せてバラバラに番号をふり、出席者が好きな歌を選ぶいつもの方法で会が進んだ。今回は北田まゆみさんの歌に票が集まった。連作「ちょっと素敵よ」に関連して望月先生より題名があってまとまると作者の言はむとする事が伝わるとお話頂く。

次いで望月先生の「言葉の力：追悼と復興への祈り～東日本大震災六ヶ月祈念印日詩歌の会～御出席の折り成田からデリーへ」という歌を拝見し旅のお話を頂く。印日詩人の詩歌朗読交換の席で印度の方の見事な通訳ぶりをうかがい自国語さえままならない私は少し凹んでしまった。

十月の歌

田村依江

・ヘリコプタ傘を振る人見えますか、意味は無いけど唯振ってみる
・草々は朝露乗せて光ってる小さな風に少しゆれつゝ
・寒き日は体のあちこち痛み出す自然の摂理逃れは出来ず

昆　明男

・冠雪の夜に冷たき雨が降る歌を作れば明日晴れるや
・元気とは気の元だよねと君が言う元が悪けりゃ元凶なんだ
・ふるさとに鮭が今年も遡上する思いでならず癒しでもなし

佐藤静子

・叔父逝きて母のはらから全て無くまたねと言えず従姉妹と別る
・祭壇に二冊の句集飾られて繰れば一句目金子兜太選
・女系にて女九人従姉妹らはみなそれぞれに母親に似る

北田まゆみ

・あら！今日のあなたはちょっと素敵よと鏡の中の私を褒める
・我が家に理由（わけ）持つ時計があちこちに置かれて僅差で刻（とき）告げており
・ひとつまみ塩もて茹でる枝豆の湯気立つ中に青勝りゆく

阿部真紀子

・頭よりひとまわりある顎の牙獲物たしかめぎゅっと出てくる
・やわやわと肉たしかめる腕よりもぎゅっと締めてガブッとやって
・獲物にも狩人蜘蛛にも味方せずしらーっと見ている自分が怖い

三木与志夫（望月善次）

・まだ顔を知らぬ二人をうろうろと探せこれこそ詩人の出会い
・香辛料のせいなのだという俗説を信じない日本を出すのだきっと
・栗鼠よお前は　栗鼠はお前と続け様浴びせ続けてもう止まらない

吉田直美

・久々の友のメールは父君の訃報を私に告げてくれたよ
・この年は花梨のまあるい実はならず秋がどんどん先に駈けてく
・何が有り何が無くても初雪の便りは届き珈琲いれる

姉歯武司

・「秋の日」に何もうかばず辞書めくるただ時は過ぎ「釣瓶落とし」と
・焦れどもどうしたのかは常の事当番の日は引くに引かれず
・困窮す自身の姿外から見大丈夫だよと語る彼は

小菅アイ（八月の歌）

・二階まで伸びしゴーヤが実をつけてタベの卓にチャンプルを喰う
・朝起きの良からぬ孫にパソコンを習ふと我は礼金払ふ
・観光も支援といひて盛岡のさんさ踊りに同期が集ふ

宮澤賢治センター今後の定例研究会の予定

12月8日（木）話題提供者：東幹夫氏（長崎大学名誉教授）
話　　題：宮澤賢治評価をめぐる覚え書き

2月16日（木）話題提供者：中里まき子氏（岩手大学人文社会科学部准教授）
話　　題：死者を想うとき：賢治と光太郎の挽歌

3月15日（木）話題提供者：岡崎正道氏（岩手大学国際交流センター教授）
話　　題：宮沢賢治と石原莞爾

エッセイ

啄木・賢治と東京病

岩手大学大学教育総合センター
佐藤竜一

明治41（1908）年1月22日、釧路新聞で実質的な編集長格として働きはじめた啄木だが、次第にその生活が嫌になりはじめた。文学的な環境から遠ざかっていた啄木は、東京へ出て活躍したいという思いに次第にかられるようになっていった。

小樽日報をやめ、まだ次の就職先が決まっていない1月7日、啄木は日記にすでにこう記している。

夜、例の如く東京病が起った。起て、起て、と心が喚く。東京に行きたい、無闇に東京に行きたい。東京だ、東京だ、東京に限ると滅茶苦茶に考へる。

「東京病」と書かれている。現代ではたとえ、地方にいてもインターネットなど情報技術の発達により、東京とそれほど大差のない情報を得られるようになった。

だが、啄木の生きた明治時代は違う。画然とした情報の格差があり、それだけ東京へのあこがれの気持ちを地方に生きる人々は持っていたのだ。

ましてや、啄木のように文学者として身を立てたいと思っている人々にとっては、東京を離れ、地方で生活すること自体何か取り残されたかのような、意識にさいなまれたことだろう。

もう一度東京に出て運命を切り拓きたい。啄木はその思いを抑えることができず、4月24日函館から三河丸という船に乗り、海路上京した。家族を友人宮崎郁雨に託してである。

東京に着いた啄木は盛岡中学の先輩金田一京助を頼り、金田一が住んでいた本郷菊坂にある「赤心館」に落ち着いた。

以後引っ越しを繰り返すが、啄木はそのまま東京を離れることはなく、東京で生涯を閉じた。

東京への思いの強さという点では、賢治も啄木に負けてはいない。

9度にわたり上京し、合計で350日ほどを東京で過ごした賢治は、地方での生活に息苦しさを覚え、東京でずっと暮らしたいとまで思ったことがあった。

大正5（1916）年3月、盛岡高等農林学校（現岩手大学農学部）の修学旅行で初めて、賢治は東京の土を踏んだ。

西ケ原農事試験場、東京高等蚕糸学校、駒場農科大学などの見学のかたわら浅草や上野に遊んだ賢治はすぐ東京に魅せられた。

当時は映画や演劇など東京でなければ触れられない文化があった。モダン都市東京は、とても魅力的に思えたのだ。

同年7月末、賢治は早速2度目の上京をしている。神田にある東京独逸語学院夏期講習を受講するのが目的だが、ニコライ堂や小石川植物園などを訪ね短歌に詠んでいる。東京の息吹に触れたかったというのが本音らしい。

翌年1月には、商用で叔父宮沢恒治に同行して上京。すっかり東京になじんでゆく。

家業である質屋兼古着商には、魅力を感じない。本来なら長男である賢治は家業を継がなければならないのだが、元々その気はないのである。

日本女子大に通っていた最愛の妹トシが入院という電報を受け取り、母イチとともに4度目の上京をしたのは大正7（1918）年12月。トシの病気は次第に癒え、イチは帰郷するが賢治は東京に残る。

地方の暮らしは息苦しい。そう思い、東京で石材関係の事業をしたいと父の政次郎に手紙を書く賢治だった。

できれば、東京にそのまま住み着きたい。そう思った賢治だが、父親の容れるところとならず、帰郷を余儀なくされた。

とはいえ、花巻での不本意な生活に行き詰まった賢治は、大正10（1921）年1月。東京に家出を決行する。

このときの東京での生活は7か月にも及ぶ。童話を書くことが天職だと思うようになった賢治は、一心不乱に童話を書く。トシが病気という電報が来なければ、あるいは賢治はずっと東京に住み続けたかもしれない。

同年12月、賢治は稗貫郡立稗貫農学校（後に岩手県立花巻農学校に昇格）教諭という定職を得ることができた。理想郷としての岩手を意味するイーハトーブという言葉を盛んに使い出すのはこの頃のことだ。

かつてマイナスにしか思えなかった故郷がいとおしく感じられるようになった賢治は、逆に東京への思いが次第に薄れてゆくのを自覚したに違いなく、以後も上京をするがかつて抱いたような東京への思いは消え去っていた。

宮澤賢治センター入会のご案内と原稿募集のお知らせ

岩手大学では、賢治生誕110年の年である2006年の開学記念日（6月1日）を期して、「宮澤賢治センター」を設立いたしました。

その骨子としては、①広く岩手大学における宮澤賢治の関心を集約する②組織は学長裁定のNPO的組織とし、趣旨に賛同する人は誰でも加入できる③設置場所は岩手大学内「百年記念館」とし、日常の連絡先は岩手大学地域連携推進センターとする④会費は当分徴収しないーーなどです。

賢治に関心があり、広い意味で岩手大学にご縁のある方であれば、どなたでも歓迎いたします。会員の方には、「宮澤賢治センター通信」をお送りしています。

なお、「通信」の次号（第14号）は3月20日を予定しています。会員各位の原稿をお待ちいたします。2月末までにメールまたは郵送で、宮澤賢治センターまで送付してください。内容によっては掲載できない場合がありますので、ご了承ください。

特別寄稿

岩手大学ミュージアム企画展「関豊太郎と宮澤賢治―賢治が学んだ72の石たち―」に寄せて

（独）産業技術総合研究所フェロー　加藤碵一

言うまでもなく宮澤賢治の地質学・土壌学の知見は、盛岡高等農林学校の恩師であった関豊太郎に負うところが大きい（なお「グスコーブドリの伝記」でクーボー大博士のモデルとされている」。また、関や賢治と従前筆者が勤務していた通商産業省工業技術院地質調査所（産総研地質調査総合センターの前身）とは以下に述べるようにいくらかの関わりがある。

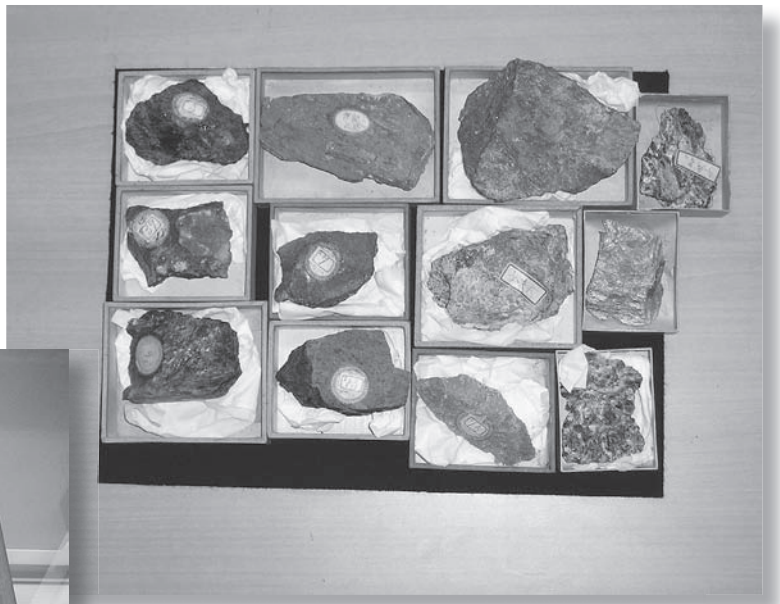
明治2年（１８６９）東京牛込に生まれた関は、明治22年（１８８６）東京農林学校に入学し、ドイツ人土壌学者のフェスカから土性調査法を、ケルネルから土壌肥料学を学んだ。東京農林学校の前身である駒場農学校は明治10年（１８７７）に設立され、ケルネルが明治14年（１８８１）に農芸化学担当の教師として、フェスカが明治15年（１８８２）土壌学担当の教師として赴任していた。さらにフェスカは同年設立された農商務省地質調査所（当時）の土性係長でもあった。フェスカの指導のもとに明治18年（１８８５）地質調査所から発行された10万分の1土性図第1号「甲斐国」は、わが国における土性調査の基本ともなるものである。これは盛岡高等農林学校の蔵書でもあり、後に関を通じて賢治の土性調査に影響したものであろう。その後、明治19年（１８８６）に駒場農学校は東京農林学校に、明治23年（１８９０）に東京農林学校は帝国大学農科大学となり、関はそれにともなって移籍している。明治25年（１８９２）に帝国大学農科大学（後の東大農学部）を卒業した関は以後各地の農学校や広島高等師範教師を歴任した。この間、ケルネルが明治26年（１８９３）に、フェスカが明治27年（１８９４）に各々在日12年を経てドイツに帰国した（ちなみに賢治は明治29年（１８９６）に誕生）。関は、明治38年（１９０５）に、その3年前に設立された盛岡高等農林学校農学科に教授として赴任し、物理学・鉱物学・地質土壌学を担当した。きしくもこの年は東北地方の大凶作の年で、彼はヤマセの原因を海水温に帰するとする「凶作調査報告書」を官報に掲載した。また、明治40年（１９０７）頃から火山灰土壌の顕微鏡的分析に着手し、コロイド化学に関心を深めた。これらの知見が後に賢治と彼の作品世界を含めて大きな影響を与えたことは容易に推測できよう。当時13歳の賢治が盛岡中学に入学した明治42年（１９０９）には、いち早くドイツから偏光顕微鏡を購入し、学生の実習に供していた。翌明治43年（１９１０）には、ドイツに留学し明治43年（１９１０年、賢治14歳）12月12日に門司港出港、マルセイユ上陸、ライプチヒ・ミュンヘンに滞在し、さらにドイツ、フランス、イギリスを巡歴してベルリンに引き返し、シベリヤ鉄道経由で大正2年（１９１３年、賢治17歳）5月24日に帰校した。この間にクランツ社製鉱物標本（75種）を購入し（岩手大学農業教育資料館所蔵）、後に教室標本として賢治らが熱心に学んだ。ドイツでは、帰国後ライプチヒ大学で教鞭を取っていたケルネルに再度師事し、またキューン博士から偏光顕微鏡による造岩鉱物の鑑定を学んだ。また、火山灰土壌中に粘土鉱物の1種であるアロフェン（英語名（allophane）：ドイツ語ではアロファン）を発見した。これは非晶質ないしそれに近いシリカ・アルミナ鉱物で、火山ガラスの風化物として土壌中に含まれることが多い。この研究は大正2年（１９１３）の帰国後も発展し、鉱物染色法の開発を踏まえて日本で始めて関東ロームと岩手火山灰中にアロフェンを発見することにつながった。この成果は、同年発行の盛岡高農校友会報21号に「土壌の粘土分に就いて」として公表掲載された。後に当然賢治も読んでいたはずである。後の得業論文「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」においても『粘土若シアロファン等ノ膠質粘土ヲ主トスルトキハ、コノ此ハ更ニ大ナルベシ』という記述がある。

盛岡高等農林学校には、関の主導により多くの岩石・鉱物標本類や地質図類・模型なども整備され、恵まれた地質学・土壌学の教育環境下で賢治らは勉強することができた。また、室内だけでなく野外における実習にも力が入れられた。例えば、関は、大正5年に賢治ら盛岡高等農林学校農学第二部第二年生に盛岡地域の地質土性調査指導をした。地質調査所による全国的な1/75000地質図幅調査が開始されたのが大正6年（１９１７）であり、いわばそれに先駆けて5万分の1の地質図を岩手の地で作成したことは地質学史上の観点からも意義が大きい。これは地質調査に関する賢治らの意欲と能力が関に高く評価された事とともに、大日本帝国陸地測量部によって地質調査に不可欠な1/5万地形図の発行（例えば「盛岡」は大正4年（１９１５）12月28日発行）による。調査結果は大正6年に「盛岡附近地質調査報文」として公表された。その後、賢治は研究科に進学するが大正7年（１９１８）2月1日付けの父宛の手紙で「本日関教授より・・・それは未だ確定無之事に候へども稗貫郡にて今春より三ヵ年の予定にて土性の調査を致すとの事にて之を学校に依頼し来るべきとの事に御座候」「・・・研究科には残り候とも土性の調査のみにては将来実業に入る為には殆ど仕方なく・・・」と記しており、結果的に研究科における土性調査は引き受けるが、盛岡高等農林学校に在職することは断ってしまう。

賢治卒業後の大正9年（１９２０）7月26日付けで関は盛岡高等農林学校を退職し、9月に嘱託として東京西ヶ原の国立農事試験場土性部に赴任し、また東京農業大学講師を

兼務した。ちなみに大正５年（１９１６）３月の盛岡高等農林学校修学旅行で賢治らは同農事試験場を訪問している。昭和２年（１９２７）には土壌肥料学会会長となり土壌学分野で活躍し、昭和30年（１９５５）に86歳で没した。賢治と関が盛岡高等農林学校を離れた後も両者間に交流があったことが書簡から知られる。大正９年８月14日付けで親しい友人の保阪嘉内宛に「ご存知でせうが盛岡の関先生が今後学校を（お）やめになりました　二十日頃出京なさるそうです　暫く西ヶ原で火山灰の研究をやると云ってゐられました。」（書簡１６８）と記されている。また、同じく大正９年（１９２０）９月４日付けで保阪宛に「この間は五日ばかり関さんに随いて大迫の附近煙草の畑の中を歩いて来ました。」とある。これは、上述のように関が稗貫郡から依頼され実質的に賢治が実施した土性調査のことである。文語詩〔夜をま青き藺むしろに〕の下書稿の題名が「土性調査慰労宴」とあるのは、この体験を踏まえたものである。賢治が晩年（昭和６年）に東北砕石工場の技師となる際、その是非を関に問い快諾されたことも知られている（書簡３０１・３０９）。また、これに先立ち刊行された關豊太郎（１９２６）『土壌學講義』（東京農業大學出版部、281p.）は、関の土壌学の授業内容をもとに講述されたものであるが、盛岡高等農林学校在籍時に賢治が受けた土壌学の全容を知ることができうる。本書の発行は大正15年（この年に賢治は花巻農学校を退職し、羅須地人協会設立）であり、本書の入手の経緯は明らかではないが（一般書店で販売されるわけでもなく、盛岡高等農林学校の蔵書にもなく、関から寄贈された可能性があるが確証はない）、賢治は亡くなるまで本書を手元に置いていたことが知られており、羅須地人協会における農業指導にも多いに役立ったと思われる。

（初期の賢治研究家として著名な小倉豊文が、賢治の死後に彼の病床周辺を整理したとき作成したとされる蔵書目録に前述の関の『土壌学講義』が含まれるが、他に同書籍名で大工原銀太郎（１９１６）『土壌學講義上巻』裳華房、１－４５２．及び大工原銀太郎（１９１９）『土壌學講義中巻』*裳華房、４５３－１０３２．）があり（いずれも学校蔵書でもある）、賢治の土壌学の知見にはこれも含まれよう。なお、『土壌學講義下巻』は刊行されなかった。）



賢治採集標本

結晶軸模型

特別寄稿

強さと感謝について

劇作家・演出家
上野火山

宮澤賢治という詩人の持つ繊細さは一般的によく指摘されるところかもしれません。ですが、その強さについて僕は思うところがあります。

賢治の強さは「ねばり」だと思うのです。その粘りは賢治自身よりも彼によって光を与えられた人々の中に見ることができる。例えば、女優の長岡輝子さん。彼女もそのお一人でした。

ＪＲ中央線に乗り「御茶ノ水駅」で降ります。明治大学側の出口を出ると交差点の角に交番が見える。交番を右手に見ながら坂を上がり、スターバックスの所で左に折れる。突き当たりまでまっすぐ進み右に曲がるとすぐに蔦の絡まる記念講堂が見えてくる。

そこが昭和の忘れ得ぬ人物「西村伊作」の創設した「文化学院」でした。

今は、数年前に建て替えられた近代的なビルになって、まったく別物の学校になってしまいましたが、僕はここで十一年間、演劇を講義しました。

長岡輝子さんとお会いしたのもこの文化学院の中でした。当時、すでに九十歳をとうに過ぎていらっしゃいましたが、月一回の「詩の朗読」という授業は退官なさるまで続けていらっしゃいました。

長岡さんが愛し、朗読の中心に据えていたのが宮沢賢治の詩でした。賢治の詩の柔らかさと激しさが彼女の口から光の欠片となってこぼれ出る様子を何度も見せて頂きました。

宮澤賢治という詩人は彼女にとってどんな存在だったのでしょう?生前、僕自身の書いた岩手の人々を描いた舞台作品をご覧になった折、長岡さんご自身がこんなことを仰いました。

「・・・あなたは岩手出身なの?」と彼女。

僕が「はい」と答えると「だったら安心ね。故郷の言葉はその故郷の人間が大事にしなくちゃ。あたしたちのすべてがそんな場所から来てるんだから、故郷からね・・・」

長岡さんは盛岡のご出身でした。僕は一関。町は違っても、同じ岩手です。僕たちは生きた時代も違います。彼女は戦前からの昭和を色濃く生き抜き、僕は戦後の昭和を青春時代として過ごしました。彼女は戦前、文化学院という時代に先駆けたリベラルな学校で学び、演劇と出会い、演劇に恋をして、やがて舞台の一線から遠のいたとき、賢治を人生の最後の仕事になさったようです。

イギリス海岸を歩く有名な賢治の写真を見るとき、僕は長岡輝子さんを思い出します。最後には車椅子の生活になられましたが、どこか風の中をコートを着て、歩いている感じがします。白髪の上品な彼女の柔らかな手を取って歩いたことがあります。いつも上を向いていらっしゃいましたが、僕には地面を見ている彼女の印象の方が強いのです。それはまるであの写真の中の賢治のように、決して空へ逃げないということでしょうか。賢治が空へ飛び出すよりも、実は空からの落下を描くとき胸を打つ描写が生まれたのも、どこか似た印象があります。お二人は、大地の人、でした。僕はそう思います。

ソーントーン・ワイルダーの「我が町（Our Town）」を長岡さんが演出なさったとき「原作はアメリカでも、演じる我々は日本人。だとすれば、舞台を日本に置き換えるべきです」と言って置き換えたのが一九七九年「わが町―溝の口」という作品になりました。地に足をつけるという態度は、自らの体験的世界に固執して頑なになることを意味しません。むしろ、世界をよりリアルに伝える方法かもしれません。

風の中でコートの襟を立て、心なしかうつむき加減に、前へ進む姿。それこそ大地と共に生きようとし、空から地上へ降りて、自然と、そしてとりわけ人間と向き合おうとしたねばり強さの象徴的姿なのではないかと僕は思うのです。

大地の上で世界と向き合う。芸術を生きようとする人間にとって、これほど重要な決意はないと思われます。なぜなら、生み出される作品は芸術のための芸術というトートーロジーを超え、しかも芸術を行うというその行為自体を己の生活そのものにするからです。生活から全ての作品が生まれ出る。こんな当たり前のことが、見過ごされ、忘れ去られて行くのではないでしょうか。賢治も長岡さんもこの地上で自分自身の言葉と格闘したのだと思います。生きる実感の中から作品を生み出そうとしたのではないでしょうか。

「雨ニモマケズ　風ニモマケズ・・・・」

生きるというのは、圧倒的な喜びである一方で、どうしようもなく残酷なことでもあります。生きることは、時には苦痛そのものかもしれません。それでも僕らは生き抜かなければならない。生き果てなければならない。死はいつもすぐそこにあって、終わりは必ずやってくるから。それまでどう生きるか。それだけが僕らに課せられたこの地上の仕事なのではないでしょうか。だからこそ、生には残酷さがつきまとう。賢治は苦しみの中で若くしてこの世を去り、長岡輝子という舞台人は百歳を超えて亡くなりました。お二人の人生は共に豊かで光に溢れながらも、どこか残酷な感じがあり、それ故に、汲めども尽きぬ深みがある。それは「粘り強さ」というあまりに東北的な精神的特質がこの二人の芸術家を引き寄せ、共感の中で、芸術的競演を可能にしていたからではないかと思います。

そして、もうひとつ、お二人に共通している重要な要素が「感謝」の感覚ではないでしょうか。

かつて、僕の舞台をご覧に

なった後、長岡さん、こんなことも仰っていました。

「・・・俳優を大切にしなさいよ。あなたの心を理解してくれる俳優を大切にしなさい。その人たちがあなたの宝なのよ」

まだ、今よりももう少し若かった僕は、自分の世界を体現してくれる俳優を大切にする、ということだと単純に理解していました。ですが、今は違います。感謝の気持ちを忘れるな、ということだと理解しています。

身の回りのあらゆるものに感謝する。勿論、人々に感謝する。僕らはすぐに増長し傲慢になり何者かになったかのように錯覚するので、「感謝」はそんな愚かさを少しだけ和らげてくれそうな気がします。

しかし、賢治を思うとき、感謝というものが、実際切実な感覚であることがわかるのです。

この世界では、ボンクラは役立たずで無駄で無意味で、なくてよいもの、目障りなもの、と見なされます。賢治が取り上げた様々な題材に見え隠れするもの、それはボンクラたちの存在ではないかと思うのです。社会的弱者という上から見た視線ではなく、この世界で欠くことのできない、貴重なボンクラの存在。思い上がった僕らの目を覚ましてくれるボンクラの存在。

映画監督のフェデリコ・フェリーニは「アマルコルド」という作品の中で、少年時代に出会ったイタリアの片田舎に暮らしていた様々なボンクラたちを描いています。長岡さんの視点もこの地上の普通の人々のボンクラな暮らしに向かっていたのではないかと思っています。

賢治は人々の嘲笑う、まさにボンクラたちを描き、自らのボンクラさに呆れ、ボンクラさに感謝していたのではないでしょうか。

良いものと悪いもの、意味のあるものと意味のないもの、価値のあるものと価値のないもの。豊かなものと貧しいもの・・・・・。

この世界の二元論はあまりに徹底しているので、すっかり気がつくこともなくなってしまっていますが、僕らは良いものだけがあれば幸福という短絡に陥ってはいないでしょうか。感謝は良いものだけにするものではなさそうです。賢治も長岡さんも、感謝はありとあらゆるものにすることを教えてくれているような気がします。この地上で生きるというのは、そういうことではないですか。あまりにも無臭で脱臭されたデオドラントな世界になってしまいボンクラも魑魅魍魎も居場所がなくなってしまったようです。しかし、考えてみれば、我々はみなどこかボンクラだし、そこら中魑魅魍魎が跋扈してやしませんか。震災の後になって、ようやくそんな現実が見え始めたようです。

ですが、賢治は遙か昔の時代に生きていながら、人間の持つこの愚かさに気がつき、だからこそ、その愚かさを慈しみ愛したのだと思います。長岡さんは女優として、そして演出家として舞台上で人間の愛しい愚かさを見つめられました。その眼差しはまさに同郷の賢治から受け継がれた呆れるほど東北的な強さと感謝に溢れたものでした。

東北地方を襲った災害をお二人は知りません。しかし、もしお二人がこの世にいたら、と僕は時々考えます。

きっと殊更目立つことなく、お二人ともご自分のできる仕事をなさったのだと思います。

残酷なこの世界で、生き抜いた二人。この芸術的にも人間的にも大先輩たちから今学ぶことは、真に強くなるには感謝する心と態度が必要ということかもしれません。

南や北に、東や西に、走るとき。

それは施すために走るのではない。

ひたすら感謝するために走るのだ。

そこにいるのは、見知らぬ君ではない。

そこにいるのは、もうひとりの僕なのだ。

文化学院の教室（2006年）。かつて長岡輝子さんが教えていたが、今は存在しない（筆者撮影）

心象スケッチ2011

宮澤賢治センター会員
平　貴文

東日本大震災後に無性に何か描きたい衝動にかられ、心の中にある2011年のイメージを、心が赴くままに鉛筆を走らせてスケッチしてみました。

震災復興の象徴として心に浮かんだのは「イーハトーヴ火山局」でした。

クーボー大博士の小さな飛行船の離着陸が容易であること、三百幾つかの火山も入ったイーハトーヴ全体の模型が収まる大空間などの条件もクリアできるよう配慮しなければなりません。また、潮汐発電所も建設していたくらいですから、当然、津波のエネルギー制御や平和利用の機能もイメージしたくなります。

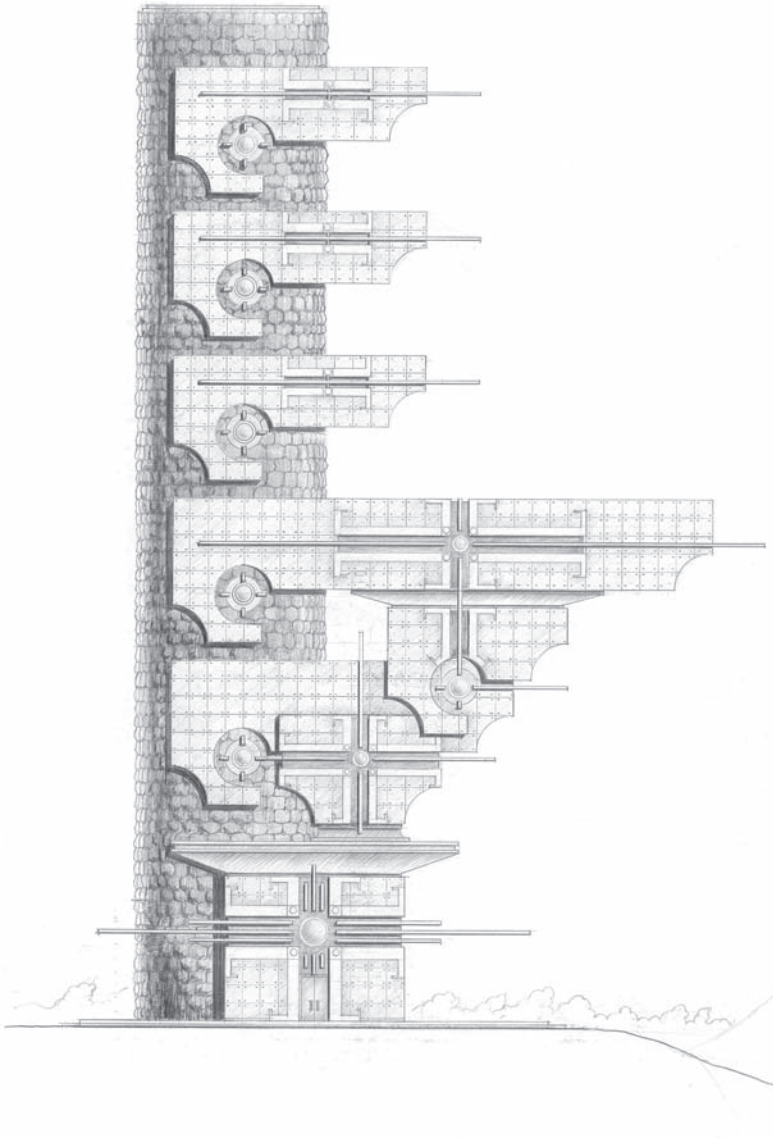
一方で、様々な機械が休みなく動き続けるような火山局の建築のイメージとは逆に、私の心の中には静かで、遠くの空を見て祈るような感情に覆われていました。

「心象スケッチ2011」は、「復興（祈り）」です。

わたくしといふ現象は
仮定された有機交流電燈の
ひとつの青い照明です
（あらゆる透明な幽霊の複合体）
風景やみんなといつしよに
せはしくせはしく明滅しながら
いかにもたしかにともりつづける
因果交流電燈の
ひとつの青い照明です
（ひかりはたもち、その電燈は失はれ）

これらは二十二箇月の
過去とかんずる方角から
紙と鉱質インクをつらね
（すべてわたくしと明滅し
　みんなが同時に感ずるもの）
ここまでたもちつゞけられた
かげとひかりのひとくさりづつ
そのとほりの心象スケッチです

心象スケッチ『春と修羅』序文より



編集後記

▽東日本大震災から8か月が経過しましたが、被災地の窮状は相変わらず。「雨ニモマケズ」と宮澤賢治が注目される現象も続いています。宮澤賢治への関心をどう深化させ拡大させるかに関して、望月善次理事が巻頭言で記しているように「〈賢治への関心〉それだけが条件です」というのが宮澤賢治センターのキャッチフレーズなのですが、今回の号も多様な内容となりました。その中で、上野火山さんが長岡輝子さんのことを書いています。長岡さんは賢治と交友があった中国の詩人・黄瀛（こうえい）と文化学院時代の友人でした。私は黄瀛の評伝を書くために、何度も御茶の水の文化学院を訪ねましたが、西村伊作設計の上品な建物がその頃は残っていました。そのことがなつかしく思い出されました。

（佐藤竜一　記）

宮澤賢治センター通信
○発行
〒〇二〇－八五五一
盛岡市上田四丁目三番五号
電　話　〇一九(六二一)六六七二
ＦＡＸ　〇一九(六二一)六四九三
E-mail ikenji@iwate-u.ac.jp
HP http://kenji.cgc.cis.iwate-u.ac.jp/
宮澤賢治センター(岩手大学内)
発行責任者　岡田幸助
○印刷　杜陵高速印刷株式会社